



TITLE:

# 京都大学言語学懇話会 1996年度活動報告

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都大学言語学懇話会 1996年度活動報告. 言語学研究 1996, 15: 93-103

ISSUE DATE:

1996-12-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87997>

RIGHT:

京 都 大 学 言 語 学 懇 話 会  
1 9 9 6 年 度 活 動 報 告

#### 第40回例会

1996年4月6日(土) 午後1:30~4:45

京大会館102号室

研究発表

「現代チベット語の名詞化接辞 mkhan の分布について」

高橋 慶治(京都大学)

「環北太平洋の言語世界：現況と課題」

宮岡 伯人(京都大学)\*

#### 第41回例会

1996年7月6日(土) 午後1:30~4:45

京大会館102号室

研究発表

「言語知識のモジュール性：統語解析の観点から」

坂本 勉(九州大学)

「ウイグルにおける漢字・漢字使用について」

庄垣内正弘(京都大学)

#### 第12回大会(第42回例会)

1996年12月14日(土) 午前11:00~午後5:00

京大会館102号室

研究発表

「アッカド語の文学作品における「来辞法」の分布について」

森 若葉(D1)

「古典シリア語前置詞 l- (ラーマド) の機能について」

檜崎 勝則(研修員)

「英語における母音間のわたり音の分節について」

山本 武史(D1)\*\*

「タガログ語の複文と前接的人称代名詞について」

酒井 陽子(研修員)

「京都アクセントの資料集について」

中井幸比古(神戸市外国語大学)

「朝鮮語学と書誌学」

藤本 幸夫(富山大学)

\*次号に同著者による論文を掲載予定。

\*\*本誌掲載の同著者による論文を参照。

高橋 慶治

Mazaudon(1978) “La formation des propositions relatives en tibétain” (BSLP 73:401-14.) はチベット語の名詞化接辞 mkhan の分布についても、短いながらきわめて有益な観察をしている。本発表は、Mazaudon の研究と一致するところがあるものの、mkhan を名詞化接辞と考えるなどの点で異なっている。

現代チベット語には、多くの名詞化接辞があるが、とくに mkhan の分布は興味深いものである。Mazaudon(ibid.:412)は、mkhan の先行詞になりうるものがチベット語において主語としての資格を持つための素性の一つであると述べている。

本発表では、mkhan と助動詞 byung の分布をもとに動詞の項構造を明らかにすることを目的とし、とくに、次の2点を考察した。

1) mkhan と sa の相違からわかる項構造の違い

2) 有対自動詞の他動詞的用法

まず、2項動詞に付加される mkhan と byung の分布について詳しく観察し、その結果、mkhan は動詞の必須項の内、基本的な語順において左端の要素に対応することを示した。これらの項は、他動詞文の GIS 格名詞、「与格主語」構文の LA 格名詞、感情動詞構文の絶対格名詞と、それぞれ格形式が異なるにもかかわらずすべて mkhan に対応する。これに対し、byung は、意志動詞については被動者名詞に対応するので mkhan の分布とは一致しないが、無意志動詞については経験者名詞や受け手名詞に対応するので mkhan の分布と一致する。

また、1項動詞では、mkhan は唯一の項である主語に対応するが、byung は意志動詞と無意志動詞とで対応する項が異なることを見た。

上にあげた問題点の1)については、与格主語構文の LA 格名詞とそれ以外の LA 格名詞は同じ格形式であるが、異なる名詞化接辞に対応する（前者は mkhan、後者は sa）点から、項構造上の機能が違っていることがわかる。2)については、mkhan が基本的に、有対自動詞の他動詞的用法における GIS 格名詞には対応せず、theme にあたる絶対格名詞が有生の場合これに対応する点から、有対自動詞はあくまで自動詞として使われており、GIS 格名詞が道具名詞として現れていると考える。また、mthong などの知覚動詞が無意志的な他動詞であることも mkhan と byung の分布から明らかにした。

mkhan も byung もその生起にある程度の制限があるものの、現代チベット語における動詞の項構造を規定する上で、大きな役割を果たすことが期待される。

(たかはし よしはる、京都大学)

アッカド語の文学作品における「来辞法」の分布について  
－与格代名詞の接辞形とともに現れる「来辞法」について－  
森 若葉

アッカド語には「来辞法」(VENTIVE)と呼ばれる接尾辞がある。来辞法の接尾辞は基本的には移動の動詞に後続し、その移動の方向が話者の方に向かうことを表すものである。しかしながら、文学作品を中心として直接話者への移動とは関わらない多くの来辞法の存在が知られている。そして与格代名詞の接辞形は基本語幹において、到着点、受益者等をあらわすが、使役語幹(D語幹、Š語幹)においてはそれに加え、被使役者を表すことができるものである。

先行研究において与格代名詞の接辞形の前の来辞法の接尾辞の有無による差は基本的に認められないとされてきた。しかしながら、アッカド語の文学作品(ギルガメシュ叙事詩、アトラハシス、イシュタルの冥界くだり)において、来辞法の接尾辞と与格目的語を表す代名詞の接辞形との共起関係を調べた結果、その分布に違いが見られることから、その従来の見方が必ずしも妥当ではないと考える。

与格接辞形の前の来辞法の接尾辞の分布は次のようである。

基本語幹においては、与格接辞形が到着点を表す場合の中で、移動の自動詞の場合には、来辞法が現れ、また数は限られるが位置を表すと考えられる場合には来辞法は現れない。ただし、到着点をとる他動詞の場合と与格接辞形が受益者を表すと考えられる場合には、来辞法が現れる場合と現れない場合がともにみられる。

使役語幹においては、来辞法の接尾辞が現れた場合には代名詞接辞形が受益者を表し、来辞法が現れない場合には与格接辞形は被使役者を表していると考えられる。

(1) eninna-ma ana kaša mannu DINGIR<sup>MEŠ</sup> upahhar-ak-kum-ma (Gilg.11.197)  
now-ptc to you/2msgDa who god/pl gather/D.ps.3msg-v-2msgDa-ptc  
今、誰があなたのために神々を集めてくれるのか？

(2) Atrahasis šunata ušabri-šum (Gilg.11.187)  
dream/sgAc see/Š.pt.3msg-3msgDa  
アトラハシスは彼に夢を見せた。

(1)はD語幹で与格代名詞の接辞形の前に来辞法の接尾辞を伴う例、(2)は与格接辞形が来辞法の接尾辞を伴わない例である。(1)では受益者を表し、(2)は被使役者を表すと考えられる。

ただし、移動の動詞が使役語幹で現れる場合に関しては来辞法の接尾辞は与格接辞形が受益者でない場合にも現れる。

(もり わかは、博士後期課程)

## 京都アクセントの資料集について

中井幸比古

京都ア（クセント）の記述調査資料により、アの個人差—京都旧市内の世代差と、近世以降のア変化を反映する中央式諸アの地域差—の一端を明らかにする。

**資料** 私の調査資料：話者は1898-1971生の16名。うち、京都旧市内14名、北区中川（言語島で古形残存）・滋賀県野洲郡各1名。考察範囲は1-6拍体言の約43,000項目。併せて既刊の2辞典所収の京都ア（『全国ア辞典』・『日国』）も対象とする。

### 明らかになった事柄

①**話者間のアの一致度**：およそ8-9割程度しか一致しない。最年少の1971生の話者の、それに次ぎ中川・野洲郡の2名の、一致度が低い。『全国ア辞典』は若（但し今や中年）との一致度が高く、『日国』は一致度低くやや特異。

②**特殊拍による核の左ずれ**：若に顕著だが、一部の老でも非常にずれる。少数の話者の資料から、機械的に生年によってアの新古を決定することは危険。

③**3拍H2型**：京都旧市内でH2→H1への変化が甚しい。通説通り単純語ではH2皆無。H2が残存するといわれる2+1の複合語も、H2以外の型への変化大；老はH1によくまとまり、若はH2以外のいろいろな型にばらつき気味。近畿各地若の「小豆・頭」類などの変化と関係？中川、次いで野洲郡は、よくH2が残存。『日国』はこの2名ほどではないがH2多く、やはりやや特異？

### ④複合語のア：

**式保存の例外の世代差**。『平山博士米寿記念論集』所収の拙文参照。『全国ア辞典』は若と一致。『日国』は老に近いが、高起式がやや多すぎる。

**核の位置**。もっとも地域差が顕著な2+3について。

京都旧市内と野洲郡は後部要素のアと無関係にHL3が原則（HL3は、H3またはL3を意味する、以下同様）

中川は後部要素のアによって核の位置が異なる。後部H1→複合語HL3。後部HL2→複合語HL4多くHL2・HL3少し（HL3はやや共通語的）、後部HL0→複合語HL3多くHL4・HL2少し。中川と同タイプは、近畿の最周辺部に存在（上野善道氏他）。

南北朝時代のア変化と関係するか？

平安朝末期、2+3の複合語の核の位置は4にほぼ統一（桜井茂治氏他）。その後、南北朝時代のア変化により、上上+上上平→不変化（H4）、平平+平上平→上上+平平（H2）。この変化が中川での、H(L)2・HL4併存の原因かと推定される。H2がL2よりも多いこともこの仮説に有利。近世以降、徐々にHL3が増加し、やがてHL3に統一された。

（なかい ゆきひこ、神戸市外国語大学）

## 朝鮮語学と書誌学

藤本幸夫

私が入学したのは昭和35年で、中国文学科に進むつもりだった。しかしその後言語に興味を覚え、蒙古語・満州語等をかじったが、遂には朝鮮語に辿りついた。

若い時には言語理論等に関心を持ち、小手先の技を面白がったり、欧米の書を引用して得意がったりするものだが、少し年をとるとこれらは全く虚しく感じられてくる。又対象とする言語に文化が望まれてくる。蒙古語・満州語では歴史資料や中国書の翻訳が多く、固有の精神世界に触れる所がない。その点朝鮮は東洋に於ては中国に垂ぐ文化を誇る。現存資料は、古いものは佚亡して、15世紀以降のものが主であるが、歴大な量を擁する。尤もその大部分は漢文資料で、ハングル資料は極く僅かである。

私は大阪外国語大学客員教授金思・先生に朝鮮語を学び、昭和42～5年間ソウル大学等に留学した。言語学科に所属しながら、主に国語学科に出入りした。

帰国して博士課程に復学したが、日本には韓国・朝鮮にはない資料が多く伝存することが判り、朝鮮語学資料の発掘を始めた。と言っても学生のことで旅費もなく、京大蔵書から着手した。京大には朝鮮学の伝統があり、かなり多量の朝鮮本を存するが、殆んどは漢文資料であり、戦後は顧る人としてなかった。韓国佚存書にも遭遇し、次第に朝鮮書誌学研究に入って行った。書誌学は諸学の基礎と称されるが、特に古書を対象とする場合には必須である。大阪大学文学部国語学講座助手・富山大学人文学部朝鮮語・朝鮮文学科に移ってからは、全国規模での調査に携った。語学資料を発掘しては論文を書き、漢字本については書誌的考察を加えた。

日本には韓国・朝鮮に失われた15・16世紀の書が完全な形で伝存するが、韓国には存しても破本や零本が多い。近年韓国では古書目録が続出するが、版種・刊者・刊処等の記述は殆んど欠き、これは書誌学の根底に関わる欠陥である。このような点に留意しつつ調査を始めて、既に20年を超えた。

木版本は中国本と同様に、朝鮮本にもその板木を彫った人、つまり刻工の名が彫られている。朝鮮本には刊年や刊処が明記されていない場合が多い。刊年・刊処・刻工名の揃っている場合、その刻工名を登録しておけば、刻工名だけのある書籍に出会った時、登録刻工名をたよりに刊年・刊処を決定し得る。これは勘にたよることの多い書誌学を、科学に換え得る一手段でもある。

泉井久之助・西田龍雄両先生に就き、その他多くの碩学の風を仰ぎながら学び得た幸せを、今つくづくと思う。生来愚鈍な私にはもはや大きな展開はないが、若い後輩方には、是非とも大きな視野と対象をもって邁進されんことを、切に希ってやまない。

(ふじもと ゆきお、富山大学)